

〈入選〉

広島県 門田さん（30代 女性）

お盆に、夫の実家に子供を連れて帰省した。義理の両親は、久しぶりに会う孫がかわいくてしかたないようだ。ちょうど3歳になった娘に、「はい、お誕生日おめでとう。」と、お小遣いを渡し、まだ5ヶ月の息子にも「あんたにもあげようね。」と、お小遣いを渡していた。

滞在中は、外食の際には、義父が、「わしが出すから。」とすべて払ってくれた。

これらのお金は、全部、義父と義母の年金からである。

義父も義母も、長く会社勤めをしていたので、孫にお小遣いをあげられるくらいの年金をもらっているようだ。

一昔前だったら、私たち子供が年老いた両親を養わないといけなかったはずだ。

もし、二人を養うとなったら、毎月、いくらかかるのだろう。

そして、もし、養うとなったら、夫の両親だけではない。私の祖父・祖母も健在である。祖父が長く教師をやっていたので、共済年金のおかげで、祖父母は経済的自立をしている。もし年金がなかったら、夫の両親、私の祖父母、夫の祖母の合計5人の援助をしなければいけない。いったい、いくらのお金が必要になるんだろう。

年金のおかげで、親や祖父母を扶養する必要がない。とりあえずは、私たち夫婦と子ども生活を考えるだけでいい。

「年金制度を考えた人は、ほんと、賢いよね。」と、夫に話すと

「そうだよな。日本って、国民皆保険だし、年金あるし、考えたらすごいことだよな。」と夫も同調した。

年金は、年をとってからもらうもの、というイメージが強いが、私や夫の親族は、それ以上のメリットがあることを知っている。障害年金である。

私と夫の親族には、障がいがある者がいて、障害年金をもらっている。この障害年金は、子どもの頃に障がいをおうと、保険料を払っていなくても、一生年金をもらえる。

「障がい年金があるおかげで、この子の将来を心配しないですむ。少なくとも食いつぶぐれることはない。」と、親たちは感謝している。

若い人たちが「年金なんて、どうせ自分たちはもらえないんだし。」というような、知ったように言う人がいるが、それは違う。いま、まさに、自分たちの両親や祖父母を支えてくれているし、自分がもし、事故で障がいをおうと、自分の一生を支えてくれるのだ。「こんなに良い制度なんだから、もっと子どもの頃から教えればいいのにね。」と私は言ってから、中学生の頃の、ある場面を思い出した。

当時、若かった社会の先生が、授業の最初か最後に、

「給料って、もらう額は多いけど、そこから税金だの、いろいろ引かれて、手元に残るのは少ないんだよな。」と、ふともらした。

授業の内容は覚えていないけれど、その一言は、とても印象に残った。

「そうか、給料から、いろいろ引かれるのか。」

その「いろいろ」とは、税金の他に、健康保険料や年金保険料ということだと、実際に自分が給料をもらう時まで知らなかった。

私は夫に「私だったら、子どもたちにこう教えるのに。。」と語り出すと、夫は、またか、という顔をして（私がよく妄想して話すので）さえぎった。「いや、別に話さなくていいから。」

以下は「私だったら中学生にこう教える」という私の空想である。

まず、私が新入社員だった頃の給与明細を中学生に見せる（当時の給与明細はちゃんと保管してある）。大人の給与明細なんて、普段目にしたことはないだろうから、興味を持ってくれると思う。そして給与からは、所得税・健康保険料・厚生年金保険料が引かれていることを見せよう。

こうやってみんなで年金保険料を払って、お年寄りの方々の生活を支えて、ひいては自分たちの生活を守っているのだ、と伝えるのだ。